

幼少・青少年期の経験・体験とソーシャル・キャピタルの関係

福岡大学工学部 学生会員 ○ 白井 颯太 福岡大学工学部 正会員 辰巳 浩
 福岡大学工学部 正会員 吉城 秀治 福岡大学工学部 正会員 堤 香代子

1. はじめに

人が生活する上で、身近な地域での人間関係(地域コミュニティ)は必要不可欠なものである。ところが、しばしば日本では近所付き合いが減ったと言われており、実際に内閣府による調査結果からも近所付き合いの希薄化が進んでいることが示されている。この人間関係の希薄化は地域の大人同士に限らず、例えば少子化も相まって子供会の加入率が低下しているなど、子供と地域の関係についても進んでいる状況にある。

ところで、子供の頃の経験や体験はその後の生き方に影響を及ぼすことが既に様々な分野において示されており¹⁾、ともすれば子供の頃における地域との関わりが大人になってからのその地域に対する意識に影響を及ぼし得るものと考えられる。しかしながら、この地域に対する意識に関わる要因については居住年数等による影響は既に明らかにされてはいるものの、子供の頃における地域での経験や体験が及ぼす影響に着目した研究はみられない。そこで本研究では、子どもの頃の地域との関わりの経験・体験と成人後の地域に対する意識について明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

成人した現在における地域に対する意識については、ロバート・D・パットナム提唱の「ソーシャル・キャピタル」(以下SC)という社会での人間関係の特徴を示す概念を用いて分析を行うことにした。なお、SCについては先述のとおり居住年数等をはじめ様々な要因に左右されるものである。そこで本研究では、回答者は出生地に住み続けている人、もしくは物心がついてから引越しをしていない人とし、さらに成人後間もない20歳以上の学生を対象にアンケート調査を実施することにした。調査概要を表1に示す。

表1 Web アンケート調査概要

調査期間	2017年10月末
調査対象	全国の20歳以上の学生
配布・回収方法	楽天リサーチによるWebアンケート
回収サンプル数	579(内、有効サンプル522)
主な調査項目	・個人属性 ・現在のSC・地域愛着について ・幼少・青少年期における地域との関わり ・現在の居住地・居住形態 など

3. 幼少・青少年期の経験や体験と現在のSCの関係

(1)SCの測定項目の基礎集計結果

SCの測定項目に関する基礎集計結果を表2に示す。信頼については見知らぬ土地の人を信頼しているとの回答割合は低く、逆に友人・知人や親戚を信頼しているという項目は、他の項目よりも高い結果となった。また、つきあい・交流については、アルバイトの同僚と職場以外で交流する人は少なくなっており、友人・知人と学校以外で交流しているとの回答割合は特に高くなっていた。社会参加に関してはその他の構成要素の個別指標に比べ、当てはまるとの回答割合が低くなっている。

(2)SCの測定指標による個人の類型化

このSC指標を用いて、個人の類型化を進める。そのために、まず主成分分析によりSC指標の構造を把握することにした。表2に主成分分析結果を示す。第1主成分は、全ての項目において高い主成分負荷量を示しており、個人の総合的なSCについて表す軸と考えられる。第2主成分は、友人・知人への信頼が正の代表的変数となっており、社会参加に関する指標が負の代表的変数となっていることから、交流の幅の狭さを表す軸と考えられる。第3主成分は、アルバイト先の仲間との交流に関する主成分負荷量が高い一方、近隣住民との交流に関する負荷量が低いことから、交流の年代の狭さを表す軸だと考えられる。第4主成分は、「見知らぬ土地での人を信頼している」が特に負の代表的変数となっており、つきあい・交流に関する指標が正の変数となっていることから、身近な人間との交流を重要視している程度を表す軸と考えられる。

表2 ソーシャル・キャピタルの測定項目の基礎集計(n=522)

	ほとんど 当ては まる	まあ まあ あて はま る	た だ あ り ま る	な ら ず あ り ま る	あ り ま ら ず	全 く あ り ま ら ず
自分の住んでいる地元の人を信頼している	8%	33%	30%	20%	9%	
見知らぬ土地での人を信頼している	3%	14%	36%	36%	11%	
近所の人々を信頼している	8%	34%	31%	20%	7%	
友人・知人を信頼している	22%	51%	17%	7%	2%	
アルバイトの同僚を信頼している	10%	36%	33%	14%	7%	
親戚を信頼している	21%	43%	23%	9%	4%	
挨拶や掃除など一般的な近所付き合いを行っている	11%	43%	17%	18%	10%	
隣近所の人と面識・交流がある	11%	40%	18%	18%	12%	
友人・知人と学校以外でも交流している	25%	39%	14%	16%	6%	
親戚と交流している	14%	44%	18%	18%	6%	
地元の人や、友人・知人とスポーツ・趣味・娯楽活動を行っている	13%	26%	19%	23%	19%	
アルバイトの同僚と職場以外で交流している	11%	21%	18%	26%	25%	
地縁的な活動に参加している(地縁的な活動:自治会、町内会、子供会など)	3%	18%	16%	29%	34%	
ボランティア・市民活動・NPOに参加している	4%	15%	16%	25%	41%	

表 3 ソーシャル・キャピタルの測定項目の主成分負荷量

	主成分			
	1	2	3	4
自分の住んでいる地元の人を信頼している	0.72	0.01	-0.15	-0.36
見知らぬ土地の人を信頼している	0.54	-0.17	0.12	-0.58
近所の人々を信頼している	0.72	0.06	-0.32	-0.36
友人・知人を信頼している	0.59	0.58	0.07	-0.04
アルバイトの同僚を信頼している	0.57	0.37	0.41	-0.19
親戚を信頼している	0.63	0.38	-0.23	-0.02
挨拶や掃除など一般的な近所付き合いを行っている	0.65	-0.25	-0.35	0.23
隣近所の人と面識・交流がある	0.66	-0.24	-0.40	0.17
友人・知人と学校以外でも交流している	0.57	0.36	0.15	0.36
親戚と交流している	0.66	0.17	-0.26	0.31
地元の人や、友人・知人とスポーツ・趣味・娯楽活動を行っている	0.63	-0.07	0.27	0.39
アルバイトの同僚と職場以外で交流している	0.54	-0.04	0.62	0.06
地縁的な活動に参加している(地縁的な活動:自治会、町内会、子供会など)	0.65	-0.56	0.12	0.04
ボランティア・市民活動・NPOに参加している	0.54	-0.57	0.25	0.02
固有値	5.44	1.58	1.27	1.10
寄与率	38.9%	11.3%	9.1%	7.9%
累積寄与率	38.9%	50.2%	59.2%	67.1%

続いて、主成分分析により得られた主成分得点を用いてクラスター分析を行い、個人を類型化した。各クラスターの主成分得点の平均値を表 4 に示す。各グループの特徴として、クラスター1は第1主成分の値が他のクラスターと比して特に大きいことから総合的にSCが高いグループであると考えられる。そしてクラスター2と3をみても、ともに第1主成分の平均値は0に近いものの、クラスター2は第3主成分が負の値になっており、クラスター3は第2主成分の値が正の値となっていることがわかる。このことから、クラスター2はクラスター3と比して交流の年代が広く、クラスター3はクラスター2と比して交流の幅が狭いグループといえる。クラスター4は特に第1主成分の値が低くなっているため総合的にSCが低いグループであると考えられる。

表 4 各クラスターの主成分得点の平均値

No	n	主成分1	主成分2	主成分3	主成分4	解釈
1	176	3.06	-1.32	0.46	-0.18	SCが総合的に高いグループ
2	140	0.32	0.45	-1.27	0.44	SCが平均的で交流の年代は広いグループ
3	96	-0.35	1.54	0.91	0.82	SCが平均的だが交流の幅は狭いグループ
4	110	-4.99	0.19	0.08	-0.98	SCが総合的に低いグループ

(3) 幼少・青少年期の経験と現在のSCの関係

前節までに現在のSCに基づく回答者の類型化を進めてきた。最後に本節では、各クラスターが幼少・青少年期に地域においてどのような経験・体験をしてきた傾向にあるのかを明らかにする。回答者には、過去の学年別(就学前・小学校低学年、小学校高学年、中学校・高校)に地域との関わり方の経験・体験を尋ねており、その頻度の平均値をクラスター別に算出した。図1に就学前・小学校低学年のポジティブな経験、図2に中学校・高校におけるポジティブな経験の頻度を整理した結果を示す。図1、2よりSCが高いグループについてはどの活動についてもその頻度が他のクラスターと比べて高くなっており、反対にSCが低いグループは頻度が低いことがわかる。とりわけ図1をみると、「地元

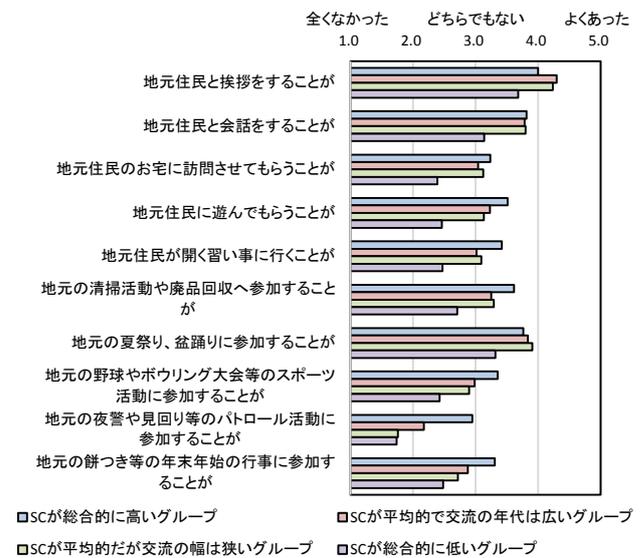


図1 各クラスターの就学前・小学校低学年の頃のポジティブな経験の頻度

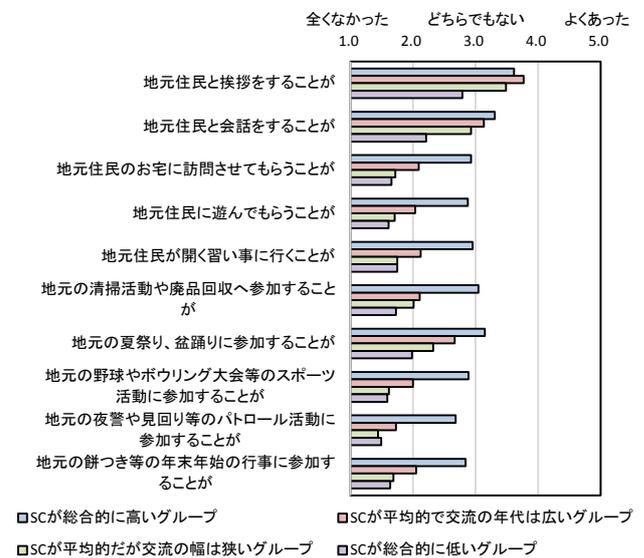


図2 各クラスターの中学・高校のポジティブな経験の頻度

の夜警や見回り等のパトロール活動に参加すること」や「地元住民に遊んでもらうこと」、「地元住民が開く習い事に行くこと」等で両グループの差が大きくなっており、就学前・小学校低学年における地元での付き合いの程度の深さによって将来における地元への指向に大きな影響を及ぼす可能性が示されている。

5. まとめ

本研究では、子どもの頃の地域との関わり方の経験・体験と成人後の地域に対する意識の関係について明らかにしてきた。引き続き、これらの因果関係を明らかにしていく必要がある。

謝辞:本研究は JSPS 科研費 16K21550 の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 例えば, 吉城 他: 幼少期における都心の思い出と現在の都心指向の関係性に関する研究, 土木計画学会論文集 D3, 2015.